

うわこい anotherED 前編

宇宙とまと

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある青年による、狂気の復讐劇・・・それは完璧な形で、終わる筈だった。

目次

前編	1
投稿済み小説	
うわこい	
anotherED	
後編	
7	

前編

2011年〜2013年春まで「月刊ヤングキングアワーズGH」で連載されていた

コミックのIF結末です。

原作はR18なので、18歳に満たない人は原作を見てはなりません。当作品は、R18的描写はありません。

この作品はフィクションです。実在の人物や団体などとは関係ありません。

18歳に満たない人は原作読んではダメなっしー。大事な事なので繰り返すなっしー。

ユキテル君に救いはありません。

ピクシブ版と内容は同一です。

前編

202x年 11月下旬 東京都内某駅 (GTOの鬼塚英吉(古い方)が、ヤンクミと取引して、陸の孤島に戻って来ておよそ一月後。) 青年が、改札口に入った所にあるトイレの入り口付近で、立ち止まっている。

青年は人を待っていた。何処の駅でも、北海道や飯田線の秘境駅ならともかく、

日毎の利用者が3桁を超える駅の場合、何処の駅でも見られる光景だろう。

(しかし、俺と同じ理由で人を待っているのは、少なくとも日本にはいないだろう。)

そして、通常と違い相手は待ち人がいる事を認識していない。

(理由は、相手を殺害するから。警察もバカじゃない、既に俺の存在に気付いているだろう。チャンスは多分最初で最後だ。)

標的たる少年……環雪輝(たまきユキテル)は、駅構内の売店に入っている。

襲撃する事もチラリと脳裏を過るも、キオスク内には数名の女子高生や、会社員

らしき客がいる。ユキテルを襲撃しても、他の客が邪魔で取り逃がす可能性も考えられる。

(売店での襲撃は止めるか。関係無い人を巻き込む事は避けたい。)

その時、横を通り過ぎた女性客がこつちを見ていた事に気付く。

(うっかり険しい表情になつていたか? ユキテルは俺の顔どころか、存在も知らないだろうが、巡回中の駅員や、警官の注意を引くかもしれない。)

幸い、キオスクのそばには宣伝用の広告が貼られている。USOの広告の他に、

来年GW前後に公開される映画のポスターが目にとまった。そつちに視線を向ける。

青年(タヒチが舞台か、主演は確か朝ドラ「とんぼ」の主人公……ヒロインの子か。)

その時、誰かの視線を感じた。後ろを振り向くも警官はいない。

(気のせいかな……入口の所に誰か立っているな、刑事か? いや、刑事って感じじゃないな。学校教師か。土曜日だけど、生徒の巡回指導でもしているのかな?)

事の始まりは、およそ一月前になる。

交際していた朝霧エリスが、ビルから飛び降り(自殺)した。

その数時間前、自らサークルの活動内容を全てネットに流してから自殺した様だ。

その内容により、現在のメンバーは全て10月の3連休明け、その

週末までには全員退学処分となり更には、OB・OGも大学を退学になり、内定や採用も取り消された。

だが青年はそれだけで済ませるつもりは全く無く、既に二人を始末していた。

最後の一人は、退学後別に交際していた女子生徒の家に逃げている。あまり外出はしていないらしく、

ようやく今日機会が巡って来た。

先の二件も証拠は残していないが、優秀な警視庁だ。既に被害者の共通点に気付いているだろうし、

俺の存在を知っているだろう。僅かに残してしまった証拠があるかもしれない。

やがて、売店からユキテルが出て来る。

（事件の事は知らないのか？テレビが故障でもしているのか？ま、そんな事はどうでも良い。）

ユキテルの背後に付き、階段を上がって行く。掲示板をみると、8分後に到着する各駅に乗るのだろう。

ホームでも、上手くユキテルの背後に付く事が出来た。

電光掲示板を見ると、快速電車通過と表示されその下に通過電車が来ます、ご注意くださいと表示されている。

「快速電車が通過します。白線の内側までお下がりください。」

メロディを聞き流しながら、ちらりと通過電車のライトを確認する。前に出過ぎていた、何人かの乗客が後ろに下がる。

（よし、ユキテルは先頭だ！ここでやろう！通過電車だから誰も割り込んでは来ないだろう。）

快速電車はやや減速しながらも、止まる事無く進入して来る。

（あと200メートル・・・もしかしたら、俺も勢い余って落ちる

かもしれんな。

150・・・100・・・70……50・・・30……
20・・・よし、今だ！)

無防備なユキテルを、背後から突き飛ばし勝利を確信する。

(お前の人生は強制終了だ！)

しかし、その時異変が起きる！ホームの端に向けつつ飛んで行く筈のユキテルの速度

が突如減速した。割り込んできた男が、ユキテルを引っ張ったからだ。

それでも完全に、ユキテルは止まらず入って来た通過電車の側面に右腕が接触する。

「人殺しだー！」

「きゃあああー」

何が起きたのか呆然と考えていた青年は、あっけなく取り押さえられる。

「落ち着いてください！警察です！」

「○○だな、環ユキテルへの殺人未遂の現行犯で逮捕する。」

直後今度は、いかにも刑事らしい顔をした数人がホームに入つて来た。

「間一髪って所でしたね。後はこちらで連行します。」

「お任せします。」

「被害者の怪我は？」

「右腕が骨折してる可能性大ですね。右足首も捻挫していると思いませんね。既に

救急車は呼んで置きました。」

「そりやどうも。」

「○○・・・雨水アルト、生天女シオンに対する殺人及び、御幸セレスに対する傷害の容疑で

お前を逮捕する！」

「通路を開けて下さい。」

「刑事さん……」

「どうしました。」

「そいつの靴片方脱げてるよ。」

「あ、どうもありがとうございます。」

最後尾にいた刑事が、赤髪で長身の青年に礼を言い脱げた容疑者の靴を回収する。

強面の刑事が、被疑者を連行して行く。

「御幸セレスって子には何もしていない。」

「本当か！……嘘じゃないだろうな。」

「何もしていない。」

「じっくりと調べてやる……」

リーダー格の刑事が電話に出る。

「ふん、御幸セレスに対しては嘘はついていない様だな。」

「先輩、空き巣が彼女と鉢合わせたとか？」

「参事官からだ。交際相手が出頭して来たらしい。犯行を認めているんだとよ。」

ホーム

「君の人生、強制終了されずによかったな。」

「しかし、この結末は君の『火遊び』が原因です。入院している間ゆっくりと考えて下さい。」

救急隊が到着し、担架に乗せられるまでユキテルは顔を背けたままだった。

一週間後

ユキテルを間一髪助けた、二人の刑事はそれぞれ紅茶とコーヒーを飲んでいる。

「ユキテルと性的関係があった、桐嶋ユノですが暴行容疑が有るそうですよ。」

「ユキテル君に対してですか？」

「いいえ、中年の男性に対してです。援助交際をしようとして、怖くなったのか相手を蹴飛ばして

負傷させたそうです。」

「相手からの正式な被害届は出ていないのでは。」

「その通りです。認めれば被害者側も児童売春防止法違反で、逮捕は免れません。」

「証拠は未だ無いのですね。」

「被害者側が、事実を認めていないのでは難しいの……。」

その時、隣室から慌てた様子の課長が飛び込んで来た。

「暇か！事件だ事件だ……いや事故か！」

「課長、何事ですか？」

「今、例の事件に関係がある桐嶋ユノって子の事を話していたよな？」

「ええ、彼女には別の暴行事件への関与した疑いが……。」

「彼女死んだぞ。ユキテルって奴の恋人の方もだ。いやこっちは未だ生きているか。」

「はい？」

「本当ですか？」

「同時刻に、飲酒運転の車に跳ねられたらしい。早乙女レナって子もその事故の数百メートル先で同様の事故に。桐嶋ユノは即死！早乙女レナは意識不明の重体だそうだ！」

投稿済み小説 うわこい a n o t h e r E D
後編

後編

10日後

事務職員に案内され、二人の女性が入って来ると、報告書を書いていた二人の刑事は手を止めた。

「そろそろもしかしたら、抗議に来られるかもしれないと思っていました。」

「こちらから、報告に行っても良かったんですが、折悪く別の事件が起きて捜査に時間を取られて。」

「妹のユノが、殺された事件ここ数日の間警察は全く捜査していませんね。」

「レナぽんの事も、全然捜査していないよね。」

「そっちの子はどちら様？レナさんの姉妹……あ、彼女は妹さんとかいないですよね確か。」

「ユキテルとは……セ」

「こらっ、大きな声で話さないで。」

「気持ちは解りますが、既に例の事件……いや飲酒運転による交通事故は、既に俺達捜査一課の手を離れています。」

ユキテルは全治三週間と診断され、都内病院に搬送されていた。マスコミが病院の周囲にうろついている為に、レナとユノは、朝早く病院に行こうとして、偶然同じ道を歩いていた。所轄署からの報告ではレナの方が、400メートルほど先行して歩いていた事が明らかになっている。

そこに偶然、夜明け前まで飲酒していた大学の同じサークル学生が、運転していた車（当然飲酒運転）が、二人に追突した。（時間的に数分の時間差）

桐嶋ユノは搬送先の病院で、30分後に死亡が確認され、早乙女レナは意識が戻る事も無く、2日後の午後3時に死亡した。

レナとユキテルの性的関係は、偶然彼女が事故に遭遇した日の夕方に明らかになった。

野外での行為を住民が目撃していたのを、学校側に通報した。その翌日レナは退学・除籍処分となった。（目撃したのは3か月以上前）ユノはナイフを所持しており、ユキテルを道連れに死亡しようとしていたのかも知れない。恋敵のレナと遭遇していたら、別の事件が起きた可能性もある。

しかし、両者とも事故死してしまい、ナイフ所持の理由は永遠の謎となった。

無論大学生達は、自動車運転過失致死罪で逮捕された。今後より罪が重い危険運転致死罪で再逮捕されるだろう。

「無論、同乗者や酒類を提供した店も今後厳罰に処されるでしょう。」
「既に交通課が動いています。」

「でも偶然同じ時間に、飲酒運転の車に追突されるなんて、あまりに偶然過ぎます。」

「テレビで、数百万分の一の確率だって言ってた。ちよつとあり得な

「よ。」

「確かにものすごく低い確率なのは確かだ。」

「でも、逆に考えれば数百万分の一の確率で起こるって事になりますし。今の所、他殺を疑う証拠は皆無です。」

「無論俺達も何もせずには、事故と断定した訳じゃありません。」

「連中が不審者と接触した形跡や、酒に興奮剤などが混入された形跡が無いのか、後車に細工・ブレーキオイル等が抜かれていないか等も、調べました。結果他殺を疑う痕跡は皆無でした。」

「でも、例えば巧妙に細工されたとか。」

「それともっと大きな根拠、この事故が仕組まれた事故じゃ無く単なる、飲酒運転による死亡事故が連続して起きただけだという、根拠があります。」

「それって、どんな理由？」

「特命係の変人警部が、この事故何も調べていないんですよ。」

話を聞いた二人の女性は、一人は驚きもう一人は面白いと言った表情を見せている。

「警察にも凄い人がいるんですね。」

「ドラマや小説の中だけだと思った。」

「悔しいですが、和製ホームズと言う異名は誇張じゃない。」

「俺達が束になっても、勝てる相手じゃありません。あの二人がいなければ、犯人は逮捕できてユキテル君は死んでいたと思いますよ。」

「少しは悔しがれ！」ポカッ

「無論その変人警部……杉下警部とその相棒冠城巡查も、数日は事件を調べてました。」

「防犯カメラの映像を調べたり、誰かから大金を受け取った形跡が無いかとか。」

だが特命係の刑事は数日で、捜査を終了した。

「今は、巣鴨で防犯指導の雑用中です。」

「もしかして疎まれてる?。」

「警察の利権が絡んでいる様なヤマ…事件でも、容赦なく真相を暴いてしまうので。」

「上層部も普段は疎んでいても、難事件になるとなんか杉下警部に頼ってしまう一面が

あつたりします。あ、これは口外しないでくださいね。」

「今回の事故、もし本当に謀殺の気配がしたら警部殿は、必ず真相を調べますよ。」

「理由も無く捜査を止めて、大人しく雑用やつてる人じゃありませんよ。」

「そんな人が捜査をしていない。」

「陰謀なんか何も無い、世間がテレビが勝手に騒いでいるだけ。本当にただの飲酒運転による事故死。」

「ま、先に言いましたが共犯者や、店の責任も徹底的に追求します。」

「交通課がですね。」

「どうもお手数をお掛け…。」

桐嶋ヨミがお辞儀をした瞬間、携帯が鳴る。電話に出たヨミの表情をみて、カオリは尋常では無い何かを感じた。

「どうしたの?。」

「ユキテル君が昨日の夜、病院を抜け出したみたいだって。」

「まじ?直ぐに病院に。」

右京と冠城が帰って来ると、鑑識の米沢が待っている。

「お帰りなさい、その様子ではユキテル君の保護や、遺体の発見は出来なかったみたいですな。」

「今の所、水死体の発見とか定置網に遺体が掛ったとかいう報告は無いです。これお土産・・・」

「秋田市南西の海岸まで、行っているのは確認できたのですが。」

4日前の夜、密かにユキテルは病院から抜け出した。当初は反感ある市民がナイフなどで脅して連れ出したとの意見もあったが、監視カメラを見る限りそんな痕跡は毛ほども無かった。目撃証言も全て、彼は一人で歩いていたらと金太郎飴みたいに、同じ証言。

ちなみに彼の携帯は、殺されかけた日に線路に落ちて壊れている。所轄署長の判断で病室前には、監視の警官も一人いるので、不審者が入るのは難しい。(最も肝心な時には居眠りしていたが。)

彼はその後、新宿駅前から秋田行き夜行バスに乗った事が確認された。同じバスに乗った乗客の証言によると、脅されている形跡も皆無で、不審な客も無し。

彼は道義的責任は免れないとしても、犯罪者では無いので自分の意志でいなくなったとすると、大掛かりにそれを追跡する事は難しい。翌日の朝8時頃秋田市南西の海岸で、最後に食堂の店主が目撃したのを最後に足取りは途絶えている。

刑事部長室

「つまり、彼が自分の意志で居なくなった可能性が極めて高い。と

言う事だな？」

「伊丹達にも調べさせましたが、不審者の気配すらありません。」

「ユキテルの親戚でも居るのか、秋田には？」

「家族は10年前火事で死亡。親族も知人も秋田にはいないそうです。」

「身投げでもする気だとしても、自分の意志だとすると警察の関与する所では無いな。」

「それが・・・警視総監が、形だけでも誰か派遣してくれと言っているそうです。」

「警視総監が・・・それを先に言え。」

「総監は昔秋田県警本部長として、辣腕を振るわれましたので、思い入れもあるのでしょう。更に一連の事件はまるでB級映画みたいな、三角関係から大事件になったと海外でもかなり報道されてまして。」

「海外にまで知られているとなると、流石に警視庁から形だけとも言えども、誰か派遣するべきだな。仮に保護した場合、一人で東京に帰らせるのも拙い。」

「総監は一日二日の派遣で良いと、言っておられるそうです。」

「さて誰を・・・ふん、丁度暇な二人組がいたな。」

いつもの流れで、杉下右京と冠城亘の派遣が決まった。

「日本海を北上する、黒潮の流れに乗った考えると、東北沿岸か・・・いやそれなら、もう発見されている可能性高いですね。」

「となると、北海道か奥尻島ですかな。」

「いや、津軽海峡に向かう流れに乗ってしまう可能性もあります。」

津軽海峡を抜けた海流は、そこで千島列島から流れる千島海流（寒流）に乗り、南へ向かう。

「新潟や秋田で、ピンを海に流したら房総半島辺りに漂着する可能性

もある訳ですか。」

「しかし、もし津軽海峡に流れていたら海流の速さを計算しても、まだどこにも漂着していない

可能性もありますね。」

「しかも、関東近海まで来たら黒潮の流れに乗って、太平洋に流される可能性もあります。」

「となると、何処に向かうか見当も付きませんなあ。太平洋にはかなり島が有りますが、無人島も多いですからな。」

「以前は航空機の補給拠点や、核実験の為に有人島だった島も、航空機の性能向上や、核実験の削減でかなり減っているそうですよ。」

「やれやれ、内村部長にはこのまま報告するしか無さそうですね。」

20分後

「それにしても、とんでもない確率で悲劇が起きたんですねえ。」

「いや冠城君……、虚偽報道ではありませんが、かなり大げさに報道されていますよ。」

「どういう事です?。」

「仮に……そうですね東京と仙台で、友人が同時刻に飲酒運転の車に跳ねられて、死亡したら確かにマスコミが言う様な、極めて低い確率です。」

「しかし、今度の事故……事故を起こした加害者達は、

同じ大学のサークルで、同じ店で泥酔するまで飲んで、帰宅する為に、数分の間を置いて、同じ方角に向け車を走らせた。」

「同時刻に、同じ店から同じルートで酒酔い運転したのだから、同じ道で事故を起こすも可能性相当高いですね。」

それでも、他の人や自転車もその時間同じ道に居ましたから、相当低い確率には違いありませんね。」

「不幸にも、偶然から友人……もしかしたら元が付くのかも知れませんが、巻き込まれてしまった。」

「なんかやるせないですね。」

「全く同感です。」

「嫌な世の中だねえ。ネットでは天罰的中なんて騒いでいるバカもいるみたいだけど、悲しくなるよ。」

「それも同感です。ユキテル君だけなら確かに天罰と言えなくも無いですが、ユノさんとレナさんは被害者だと思いますよ。」

「二人がユキテル君と出会う事が無かったら、二人……いやユキテル君も入れれば3人の人生が、ゲームセット……失礼、終わる事は無かったのかも知れませんか……それと、角田課長何か情報が？」

「薬物の違法取引情報が入ったんだ。暇なら手伝ってくれよ。」

「もちろんです。」

「人探しも終了しましたし、場所何処ですか？」

「大田区蒲田にある廃工場だ。番地は……取引時間は今日の夜9時らしい。」

課長が、地図を閉じようとした時、地図が倒れ弾みでテレビのリモコンに触れた。

ちょうど、お昼過ぎの情報番組の時間の様だ。芸能情報のコーナーで、今後注目される新作映画の予告をしている。来年春に公開される恋愛映画で、主演女優は未だ22歳らしい。

「課長もしかして、主演女優のファンなんですか？」

「かみさんが、子役時代からの大ファンでね。」

「十数年前は、数十年日度の天才子役として有名でした。」

「確か中学と高校時代は、活動休止していたらしいですね。高校卒業後再び芸能界に復帰したらしいですね。右京さん……どうしまし

た？」

「彼女を何処かで見た記憶がありますねえ。」

「何時ですか？」

「確か時期的には、彼女が中学3年の頃だったと思います。現実に見たんじゃ無く、恐らくテレビだったと思います。」

「中学時代って、活動休止してたんだろ。他人の空似じゃねえのか？」
「そうかもしれません。」

「いいや、右京さんに限ってそれは無いんじゃないですか？」

「それは買い被り過ぎですよ。」パチツ（リモコンでテレビを停止）

「じゃ、8時に現地集合で。」

杉下右京は紅茶の準備を始める。もうすぐ午後3時だ。

この時はまだ知る由も無かったが、24時間後右京の記憶は勘違いでも、他人の空似でも無い事を知る。

そしてその彼女以下、同級生28人が『試合終了』となる事になるのだが………